



都甲谷の歴史

く六郷満山と吉弘氏く

都甲谷の歴史

— 六郷満山と吉弘氏 —

目次

| | |
|--------------------|----|
| はじめに 都甲地域の風土と歴史 | 4 |
| 一、六郷満山の興り | 6 |
| 二、都甲荘の成立と新田開発 | 12 |
| 三、六郷山寺院の発展と加礼川・長岩屋 | 18 |
| 四、都甲地域の鎌倉武士の活動 | 23 |
| 五、都甲地域と蒙古合戦 | 28 |
| 六、吉弘氏と都甲地域 | 32 |
| 七、戦国時代の都甲地域の英雄たち | 40 |
| 八、吉弘氏と屋山・笥城 | 52 |
| 九、吉弘統幸と石垣原の戦い | 58 |
| 十、吉弘統幸の伝説 | 66 |
| 十一、都甲地域の中世石造物をめぐる | 71 |

卷末

| | |
|---------------|----|
| 中世の都甲地域に関わる年表 | 81 |
| 人物索引 | 82 |
| 都甲地域の文化財 | 83 |
| 参考文献一覧 | 84 |
| 参考史料集 | 84 |



屋山遠景（大分県立歴史博物館写真提供）

はじめに 都甲地域の風土と歴史

国東半島はその中央にある両子山の噴火によってできた丸い半島です。国東半島には、その中心から放射状に山と谷が織りなされ、それぞれに豊かな自然と文化が根付いてきました。都甲谷では豊後高田市の中心部を走る桂川の支流、都甲川に沿って集落が作られ、東西に細長い形をしています。条里制に基づくまとまった田地や、急峻な谷間に作られた小さな棚田は、先人達の知恵と労力によって造られたもので、それぞれに違った美しさがあります。

国東半島には多くの天台宗寺院が点在しており、それらをまとめて六郷山寺院と呼びます。仁聞菩薩にんもんぼさつによる養老（八世紀のはじめ）の開山伝説が有名ですが、実際にその文化が花開いたのは平安時代中後期ごろからと言われています。都甲地域はその中心的な寺院である長安寺・天念寺を有し、六郷満山の世界を形作ってきた中心地であると言えます。長安寺は鎌倉幕府の祈願所として古くから崇敬を集めましたし、天念寺は旧暦の正月に行われる修正鬼会しゅじょうおにえが現在にも伝わっています。

中世、都甲地域は都甲荘という荘園でもありました。宇佐神宮内に存在した弥勒寺みろくじという

寺院の領土として成立し、新田開発が進んでいきました。古文書などからの検討により、古代や中世から耕作されていた田んぼが多くある事が分かっています。

また都甲地域では多くの武士たちの活動も見られます。鎌倉時代・南北朝時代には都甲氏の活躍が見られ、戦国時代になれば大友氏の重臣吉弘氏が都甲の地を本拠地とします。大友宗麟の重臣の一人である吉弘鑑理よしひろあきただや、西の関ヶ原と呼ばれる石垣原の戦いで活躍する吉弘統幸ゆきは有名です。また名字は違いますが、高橋紹運じょううんや立花宗茂といった人物たちも吉弘氏の一族で都甲出身の人物です。

このテキストでは、そういった都甲地域の歴史と文化の魅力をたっぷりと伝えていきます。現在に残された文化財・荘園の風景も紹介しますので、実際に現地へ行って都甲地域の歴史と文化を肌で感じてみてはいかがでしょうか。

1、六郷満山の興り

「峰入り」の修行は、天台宗の行者が険しい山々を越えて寺院を廻るもので、密教文化の典型といわれる修行の一つです。国東半島の峰入りは、十年に一度にはなりましたが、一五〇キロもの行程を六日間かけて行われる全国でも最大規模の「峰入り」です。

では、なぜこの国東半島に、大規模な「峰入り」文化が芽生えたのでしょうか。その秘密は六郷山寺院にあります。今から千年以上前、元々国東半島には山岳信仰が根づいていましたが、そこに宇佐宮弥勒寺から天台宗の仏教文化が持ち込まれました。そして、両者が融合した独特の文化が生み出されたのです。例えば、加工のしやすい火山岩質の土地である国東半島では、多様な石仏や磨崖仏まがいぶつ、国東塔や宝篋印塔ほうきょういんとうが多く作られて信仰・供養の対象となりました。また、六所権現の社を伴う寺院が非常に多くあります。

そして国東半島の六郷（安岐・武蔵・伊美・国東・田染・来縄）には、数多くの天台宗寺院が成立しました。それらの寺院は仏事の内容毎に本山・中山・末山と3つに分けられ、一般には「六郷満山」と呼ばれます。

良好な修行の場となる地形に恵まれ、寺院の一大密集地でもある。それが国東半島なので。「峰入り」の文化もそれらの要因がもととなって成立した文化と言えるでしょう。

さて、現在も多くの寺院を残している国東半島ですが、その多くの寺院には「仁聞菩薩にんもんぼさつ」にまつわる伝承が残っています。仁聞菩薩は宇佐宮八幡神の化身であるとされ、養老年間（八世紀初頭）に国東半島に二十八の寺院を創建したといわれています。六郷満山文化の中核を担っている仁聞菩薩ですが、実はその存在はあくまで伝説とされており、六郷満山の寺院の創建はほとんど謎に包まれています。

鎌倉時代には三十三の寺院によって構成されていた六郷山寺院ですが、多い時には六十を超える天台宗寺院が存在し、それらは一つのまとまりを持って存在していました。そしていつしかその中心的役割を担うようになったのが、都甲地域の長安寺です。安貞二（一二二八）年の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写ろくごうざんしよこんぎやうならびにしよどうやくさいとうもくろくうつし」によれば、長安寺は六郷山の惣山とされ、鎌倉時代には大友氏は長安寺住職を「六郷山執行別当ろくごうざんしぎやうべつとう」と認識しています。長安寺は六郷山寺院全体をまとめあげ、国家の大事を占うような祈禱を行う際にも、積極的な活動が見られるようになります。例えば文永元（一二六四）年に、筑前国から牛が死に始め、九州中の牛が突然死するという事件が起こりますが、六郷山では八三〇人の僧侶を集めて大般若経な

どを転読させました。これだけ多くの僧侶を集める事ができた背景には、長安寺が中心となつて仏事を行う体制ができていたというこののあらわれでもあります。

長安寺で有名なのが、国指定有形文化財である木造太郎天像と銅板法華経です。

木造太郎天像は、その造形が珍しいだけではなく、像を形成する各部材の内側にたくさんぼくしよめいの墨書銘を持っています。この墨書銘により、木造太郎天像が大治五年（一一三〇）に作られた事や、太郎天が不動明王の化身である事、願主をはじめ百人以上の僧俗と結縁した事が分かるのです。

同じく銅板法華経は内容から保延七年（一一四一）に製作された事が分かる他、



長安寺太郎天像

作者である紀重永きのしげながの銘が入った銅板経が
求菩提山くぼてさん・英彦山ひこさんといった修験道しゅげんどうの山々で発
見されており、北部九州の山岳霊場の結び付
きを示しています。

また「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目錄写」
において、中山寺院の筆頭とされ、修正会しゆじゆえ・
修二会しゆにえをはじめとする諸仏事を盛大に行つて
いたのが天念寺です。天念寺は、中世におい
て天念寺岩屋を中心とする多くの坊舎や多く
の岩屋をあわせて長岩屋と呼ばれていまし
た。天念寺は豊後高田市のシンボルの一つで
ある修正鬼会しゆじゆおにえ（単に鬼会とも）を現在に伝え
る寺院として有名です。鬼会自体は、豊後高
田市外でも岩戸寺・成仏寺（ともに国東市）
に残っていますが、毎年の旧正月に鬼会を行



修生鬼会

うのは天念寺のみとなつてしまいました。

修正鬼会は、その名の通り修正会³の際に鬼会を行うというもので、現在では五穀豊穡・息災延命・家内安全を願う年中行事として知られています。ここでは、この修正鬼会の歴史について少し見ていきましょう。

修正鬼会は養老年間に仁聞菩薩が「鬼会式⁴」を六郷山寺院に伝えた事により創始されたとされています。しかしこれもまた伝承で、実際に鬼会が記録に見られるようになるのは、鎌倉末期から室町時代にかけてになります。鎌倉時代には他の天台宗寺院と同じように修正会が六郷山寺院で行われていた事が分かっていますが、鬼会が修正会から分化したもののなか、どこからか持ち込まれて融合したものなのか、詳しくは分かっていません。

余瀬文書の「夷山所領坪付⁵」には、鎌倉末期に夷山靈仙寺^{えびすざんれいせんじ}で行われていた鬼会に必要な檀供^{だんく}（餅、つまり鬼の目）を作るための田んぼが存在していた事が示されています。これが国東半島の鬼会の最初の記録です。現在の修正鬼会でも欠かすことのできない「鬼の目」ですが、修正会の頃からあわせれば、鎌倉時代の初期から作られていた事も分かっているのです。また「六郷山年代記⁶」によれば、永徳二（一三三二）年に長安寺の豪金^{ごうきん}と呼ばれる僧が、屋山の鬼会・修正会を再興したとされていますが、ここからも修正会と鬼会は別々の仏事と

して分かれていた事が分かります。

この後、修正鬼会は六郷山の多くの寺院に広まり、江戸時代の終わりには約二十の寺院で行われていたとされています。豊後高田市内でも、長安寺・岩脇寺・智恩寺が明治から昭和初期にかけて修正鬼会を行ったという記録が残っており、各寺院には立派な鬼の面が残っています。

1 それぞれの六郷山寺院がどのような仏事や祭を行っていたかを記した目録です。

2 執行は天台宗寺院などにおいて寺務を司る役職です。また別当は寺院を統括する役職です。

3 修正月会とも。前年の悔過(過ちを悔い改める)の為の仏事。全国的には奈良時代から続くと考えられています。追儺ついなという鬼追いの儀式もありますが、国東半島の鬼会とは、意味合いが全く違います。

4 鬼会を行う為の書物。六巻あったと言われます。

5 坪付とは、地域における宅地・田畑などの状態を詳しく記したもので、土地所有者の権限の及ぶ範囲を証明する為によく作られました。

6 六郷山寺院の歴史をまとめた記録です。江戸末期以降にまとめられています。宇佐神宮の宮司出光家の本を参考にしたとあり、散逸した文書の内容も補完する貴重な記述が多く残っています。

2、都甲荘の成立と新田開発

豊後高田市域には非常に多くの荘園がありました。田染荘は有名ですが、他にも小野荘・来縄郷⁷・真玉荘・香々地荘・白野荘・草地荘、そして都甲荘は、それぞれ宇佐宮やその神宮寺である弥勒寺^{みろくじ}の財政を支える重要な荘園でした。都甲地域には中世を通して荘園のムラが存在し、今もなお長い歴史を持つ田んぼや寺社が残っているのです。

現在の都甲地域は都甲谷に広がる非常に広い領域を指しますが、平安時代後期頃に成立した都甲荘の範囲はそれほど広くはありませんでした。単純に考えると今の都甲地域から長岩屋地区と加礼河地区、大力地区の川沿い以外の殆どを抜いた地域になります。この章では都甲荘本来の範囲で、平安時代から中世にかけて、どのような荘園の風景が広がっていたかという事について見ていきたいと思えます。

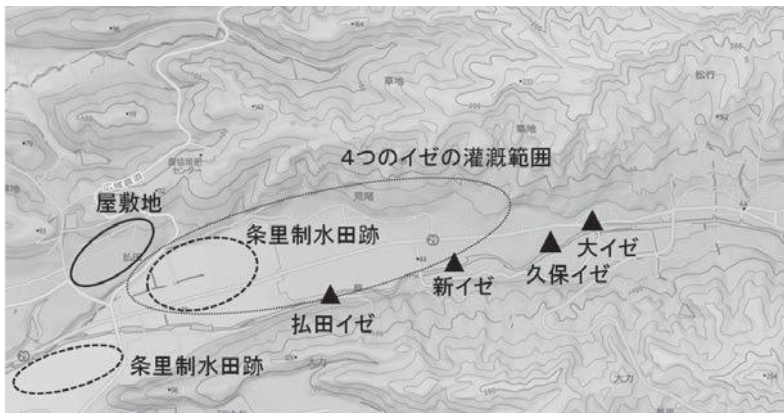
都甲荘は宇佐宮弥勒寺領として立荘されました。宇佐宮領は平安時代の中後期に九州各地に拡大しますが、都甲荘もその流れの中で開発・寄進されたと考えられています。立荘当時の史料に乏しく、時期が確定できませんが、付近の水田開発の研究が進み、立荘の時期は

十一世紀前半頃と推定されています。

鎌倉時代の「都甲浦地頭職次第」⁸によれば、荘園の開発は「左近大夫源経俊」という人物が行い、山香に住んでいた娘婿の「大神貞正(将)」という人物の手に渡ったとされています。この頃の荘園の領域は、西は払田付近、東は松行付近ほどの大きさであったようです。

さて、都甲荘の開発はどのように進められたのでしょうか。都甲荘地域は都甲川に沿って比較的広い平地が存在しています。特に西側の荒尾・払田地区は最も開けた土地になります。元々この地域は、旧森湾と呼ばれる古い海岸線の地域と関係が深いとされています。現在の地形から見ても、東半分の急峻な山谷にできた地区と比べると開発が容易な地域でした。

都甲地域の最西部に位置する荒尾・払田地域には、



都甲荘地域の水田とイゼ

八世紀頃に作られたとされる田地がありました。「荒尾・払田条里遺跡」です。その名のとおり、荒尾・払田地域一帯は条里制⁹による区画がなされており、古代的な土地利用を一部現代に残していました。二〇〇二年に行われた発掘調査では、弥生・古墳時代の土器や姫島の黒曜石（くろようせき）を利用した石鏃（せきぞく）（矢じり）、竪穴式住居跡などが発見され、先史時代からこの都甲地域西部に人々が生活していた事が確認できました。

荒尾・払田地域には都甲荘の誕生以前から水田がまとまって存在していたので、その付近から新田開発が進んでいったと考えられています。そうして都甲荘の生産能力は、平安後期から鎌倉時代にかけて大きく成長していったのです。

莊園の中心的な水田地域である荒尾・払田地区については、堰（せき）（イゼ）の成立を見ていくことで、中世・近世の田地の状況を把握する事ができます。荒尾・払田地区には大まかには四つの堰があります。大イゼ・久保イゼ・新イゼ・払田イゼ、それぞれの堰が都甲川沿いに一直線上に並んでおり、川上から順番に堰ができていった事が分かります。

最も初期に造られた大イゼは、成立年代こそ不明ですが、地区全体を灌漑する大規模な堰です。この大イゼがなければ、地域に水を引けないので、条里制が整えられた時代に原型が存在していただろうと考えられています。大イゼからの取水では、北周りの大きな水路に向

けて南から北に灌漑をしています。

次の久保イゼは大イゼのすぐ下に造られています。こちらも年代は分かりませんが、中世の堰だと推測されています。久保イゼから取られた水は大イゼだけでは手薄になってしまふ条里の最上部の灌漑を行い、そのまま大イゼの水路を補強すべく合流しています。

新イゼは妙覚寺の梵益和尚が、寛文三年（一六六六）から二年がかりで完成させたとされます。妙覚寺の記録によれば、荒尾の水田の旱損を憐れに思った梵益和尚が、村人を組織したとあります。この新イゼも久保イゼと同じく取水が不足する条里中腹の灌漑をして大イゼの水路に合流します。

最後の払田イゼは、新イゼの後に造られた



大イゼ

とされています。条里の下流部分の灌漑をして他のイゼと同じく大イゼの水路に合流します。四つの堰が並んでいいるおかげで、荒尾・払田の広範囲において水を十分に送り出す事ができます。これらの堰は、灌漑の不足を補う為に時代を追って順次造られてきました。大イゼ・久保イゼだけは中世以前から存在していたと見られるので、条里の趣が残っていた頃の田地とも少し形が違っていた事も分かります。

次に中世における屋敷地について見ていきます。都甲荘の屋敷地は荒尾・払田地区の丘陵部に位置しており、発掘調査によって土塁や堀の遺構がかなり多く残されています。荘園と言えばどこかのどかな世界と想像しがちですが、荘園の統括者・管理者の屋敷には堀や塀などが張り巡らされる事は珍しくなく、実際に彼らが暴行を受けたり、殺害されたりする事例は多くあります。都甲荘においても室町時代に弥勒寺から派遣された都甲荘の管理者である「西東両別当」さいとうりょうべつとうが何者かによって殺害される事件が発生しています。戦国時代にも惣堂達職そうどうたつしき(荘園支配の役職の一)であった時枝氏が、現地の武士である都甲氏に押妨おちぼうを受けていた事を示す文書が残されています。

更に都甲荘の支配は、戦国時代には大友氏の家臣荒武宗右あらかたけそうゆうという武士に受け継がれ、その子孫が跡を継いでいきます。このように荒尾・払田地区には時代によって様々な身分の人々

が管理しており、どこに誰の屋敷が存在していたかという事を明らかにするのは難しい状況にあります。奥の丘陵地に屋敷が集中していたということは都甲荘の姿をイメージしやすくしてくれます。

都甲地域には石垣の水田が非常に多いですが、稲作の為に石垣を用いるようになったのは江戸時代以降の事で、中世の民間にはその技術がなかったと考えられています。逆に古い棚田は土塁によって、地形に沿って作られたので、石垣の水田と比べて曲線が多いという特徴があります。

7 来縄郷は宇佐宮の根本荘園「十郷三荘」に含まれ、郷と付きますが荘園の性格を持っています。

8 都甲地域の歴代の地頭の名前を連ねた目録のようなものです。

9 古代に朝廷によって進められた、田地を正方形状に区切って把握しようとしたシステム。

3、六郷山寺院の発展と加礼川・長岩屋

都甲地域の東半分、加礼川地区・長岩屋地区といった地域は元々都甲荘の荘域ではなく、六郷山領、中でも長安寺や天念寺などが統轄する領土でした。

六郷山の寺院化・峰入りの場としての成立は九世紀末とされていますが、その活動が活発化するのには十一世紀末から十二世紀にかけての事だと言われています。六郷山寺院には、その時代の仏像が多く残されており、その頃には六郷山寺院が天台宗延暦寺の影響を受け始めていると指摘されているのです。「六郷山年代記」によれば永久元（一一一三）年には天台無動寺（滋賀県大津市）の末寺となり、保安元（一一二〇）年には延暦寺に寄進されています。それによって六郷山寺院は、一体に活動するようになり、六郷山領が誕生しました。こうして都と強い結びつきを持った六郷山寺院には、造形の整った美しい平安仏が多く残りましたし、六郷山独特の文化を築く素地が作り上げられました。

では、これらの地域の中世の状況はどのようなものだったのでしょうか。都甲荘と同じく史料などから考えてみましょう。

加礼川地域は長安寺領として新田開発が進みました。都甲荘と比べれば山間の地域であり、田んぼは小さく、棚田も多く見られます。長安寺領の仏神事を行う為の水田（仏神事料田）に関する史料が多く残っています。これによって中世にあった水田の名前が明らかになり、実際に中世に耕作されていた水田を推測する事ができます。

寛元二（一二四四）年のものと推定される「ややまでらいんじゅおうにんおきぶみあん屋山寺院主応仁置文案¹⁰」によれば、加礼川の水田は、屋山寺（長安寺）講堂・六所権現・持仏堂や虚空蔵岩屋こくうざうの仏神事に充てられ、長安寺の住僧に得分が配分されていたようです。これらの住僧は各地域に下って坊を形成し、後々には長安寺から離れた場所の坊が独立した経営を行うようになっていったと考えられています。

例えば道脇寺は中世では常泉坊という名前の坊でしたが、室町時代には、領主の吉弘氏から坊領の安堵を受けるようになっており、独自の四至注文¹¹を幾度か作製しています。そして近世には道脇寺という独立した寺院となります。こういった坊々の田地の開発が現在加礼河地域に点在する小集落のスタートになったと言えます。

同じく応仁置文案には、かつての加礼河地域の状況について、「元々は天魔楼の中のように、人は通る事が出来なかった」と書かれており、新田開発が容易ではなかった事を物語っている。

間に作られ、昔から洪水を繰り返したとされる長岩屋川の影響もあり、現在でも広い田地は多くはありません。

長岩屋地域の田地の開発については、室町時代前期の状況を示す史料があります。「六郷山長岩屋住僧置文案¹²」によれば、長岩屋地区は中世には住僧以外の居住を禁じられ、山公事やまくじ（銭など）と夏供米なつのくまいが併用して徴収されていたようです。

同置文によれば、長岩屋地区には六十二にもなる坊や屋敷が存在し、それぞれに開発が進んでいたようですが、離れた所にあった坊や屋敷の僧たちが、既に夏供米を納める事を渋っている状況があったようです。応永十一年（一四〇四）には長岩屋の講堂・権現堂（天



長安寺付近の坊跡

念寺講堂・身濯神社)が焼失し、応永年代後半には大内氏による宇佐宮再興事業が始まります¹³。このように様々な場面で米や労働力の供出を求められた六郷山寺院は疲弊していたようです。

しかし同置文は、山公事・夏供米の上納を強く義務付けるものでした。その背景には大友氏の重臣吉弘氏の存在があったようです。署名の最後にごんのしょうそうず権少僧都さいこうしやうげんごんのべつとう豪経と見えますが、これは系図に見える吉弘綱重の弟豪慶と同じ人間だと推測され、再興執行兼権別当という肩書が付いています。再興執行というのは夏供米を納めなくなった田地の取り立て再開に関わる責任者、権別当は六郷山をとりまとめる役職でした。また奥書には、文書の内容についての追認・承認がよくなされますが、同置文では吉弘綱重によって特に夏供米の再興に関する追認がなされています。

10 長安寺で活躍した僧応仁が記したとされる打札(高札、立て札)の内容を紙に書いたもの。置文は掟や決まり事の意味。

11 領土の範囲が分かるように、四方の地名や目印を記したりリストのようなもの。

12 長岩屋地域の住僧に出された掟のようなもの。

13 宇佐宮内弥勒寺も全焼しその再建を行ったり、豊後の担当である仮殿の造営を行いました。

4、都甲地域の鎌倉武士の活動

平安時代末になると豊後国内・国東半島・都甲地域それぞれに武士が登場します。

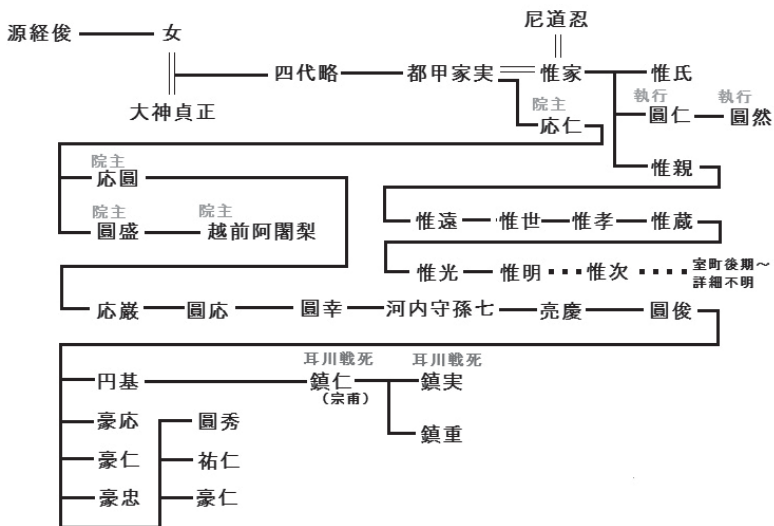
豊後国内で特に有名なのが緒方惟栄これよしです。惟栄は宇佐神宮の神官出身の大神姓おおが¹⁴の武士で、緒方荘（現豊後大野市）を武力の根拠としていました。「平家物語」によれば、惟栄は源氏方から平家討伐の宣旨を貰った後、廻文めぐらしごみを豊後中に出して国内の武士を取りまとめたと言われています。そして平家方に付いていた宇佐神宮や長安寺を焼討にし、葦屋浦あしやうらの戦い（現福岡県遠賀郡）で源氏方の勝利に貢献しました。長安寺が六郷山寺院の歴史を記した「六郷山年代記」によれば、寿永二（一一八三）年に「男形三郎是吉おがた（緒方惟栄）が天下に乱逆して放火をした。屋山（長安寺）は焼失した。」とあり、建久四（一一九三）年まで寺院が退転したとされています。

都甲地域には都甲氏をはじめとする武士が登場しました。都甲氏も緒方氏と同じく大神姓の人物で、都甲荘を開発領主源経俊から譲り受けた大神貞正の子孫にあたります。都甲氏は平安後期からその地縁・血縁を利用して都甲荘に進出し、鎌倉時代には地頭としての活動が

見えるようになります。

また都甲氏一族は六郷山寺院の僧を輩出しており、前の章で六郷山寺院をの成長に大きく寄与したと紹介した応仁は都甲氏出身の院主であり、都甲氏の系図によれば戦国時代に至るまで都甲氏出身の六郷山院主、執行が多く見えます。これらの状況から、都甲氏は都甲地域だけではなく、六郷山寺院領も含めてかなりの勢力を持っていたと推測できます。

鎌倉時代前期を通して、都甲氏の大きな活動を史料から見る事はできませんが、都甲氏の地頭職相続に関する譲状には、鎌倉時代の特徴を捉えたものがいくつか見られます。



都甲氏系図

まずは「悔返くいかえし」です。武士の相続は長子相続、つまり長男が跡を継ぐというイメージがありますが、これは江戸時代まできちんと決まっています。また鎌倉時代の相続では、都合が悪くなった際に、相続主が相続のやり直しを行う「悔返」が可能でした。中世では「本主権」と呼ばれる、元の所有者の権限がとて強く、物を売ったりした際にも取り返す事ができる事例が多くありました。つまりは、一度手放した家督にも口出しする権限があったのです。

大神(都甲)惟家これいえは、長男惟氏に一度は地頭職を譲りますが、「きりやうなきニよて」悔返し、代わりに弟の惟親に相続をさせています。しかもこの相続は複雑なことに、その五年後、惟家は都甲荘地頭職を「あまこせ尼御前のをんふ思深かききによて」妻の尼道忍に譲ってしまいます。鎌倉時代には女性が地頭になる事も普通でしたが、「のちハ五郎左衛門らうさへもん左衛門これちか惟親ニ」所領を譲り与える事を前提として、幕府を通じて正式に妻に地頭職を譲ってしまったのです。

そして更に五年後、尼道忍から惟親へようやく土地が相続されました。このように都甲氏の譲状からは、鎌倉時代の複雑な相続の特徴が幾つも見られるのです。

都甲氏は宇佐宮神官から出た土着の武士でしたが、鎌倉時代中期くらいから御家人としての活動が見えます。その一つに京都大番役を勤めている事が挙げられます。京都大番役は、

内裏だいりや院御所いんのごしよ、六波羅探題を護衛する役目であり、全国の御家人が招集されました。都甲惟家は、子の惟親を派遣して六カ月の京都大番役をさせています。惟親は院御所西面之大門の警護を全うしました。

京都大番役はただの軍役ではなく、地方の武士が京都に上るまたとない機会だったという指摘があります。惟親は都甲地域の代表として京都に赴き、政治の動向や文化を吸収して都甲地域に帰ってきたのかもしれませんが。惟親はこの後の歴史的大事件で大きな活躍をする事なるのです。

御家人としての性格を持ち始めたという事は、鎮西探題や守護の支配下に置かれるという事でもあります。つまり都甲氏はその頃から鎮西探題北条氏や守護大友氏の配下に加えられるようになり、命令伝達などの文書を受け取るようになっていきます。

また、都甲荘は弥勒寺領みろくじであったため、都甲氏は国東半島の他の弥勒寺領の武士との交流が深かったと考えられます。例えば古文書の中でも、同じ弥勒寺領の真玉荘の真玉氏や、伊美荘の伊美氏と連名で書状を送られていたり、竹田津荘の竹田津氏とともに大友氏の命令に従っていたりします。

14 古来宇佐神宮は、大神姓と宇佐姓の神官によって運営されていましたが、政争の結果、大神姓の神官は排除され、その多くは豊後国の宇佐宮領の荘官、後には武士へと変化していきました。

5、都甲地域と蒙古合戦

鎌倉時代最大の事件と言えば元寇です。二度にわたるモンゴル軍の襲来は、御家人の奮戦と神風によって退けられました。大軍で攻めよせるモンゴル軍との戦闘に駆り出され、抵抗した多くは九州各国の武士たちでした。肥後の御家人、竹崎季長の活躍を絵にした「蒙古襲来絵詞」もうこうしゅうらいえしは非常に有名ですが、都甲地域の都甲氏も大きな活躍が知られている御家人です。

一度目の襲来である文永の役の際には、都甲惟親これちかは「鳥飼瀉の戦い」とりかいかたで活躍しました。鳥飼瀉の戦いは「蒙古襲来絵詞」にも描かれる重要な合戦で、絵図にはモンゴル軍の火器「てつはう」てつはうをもものともしない季長の姿が見られます。この戦いで勝利した武士達は勢いづいて連勝を重ね、モンゴル軍を撃退しました。惟親は残念ながら絵図には描かれていませんが、古文書によれば惟親の活躍を幕府が認める過程が見られます。鎌倉時代の戦功は自己申告制でしたが、幕府にとっては遠隔地の九州の戦場だったので、惟親の活躍ぶりを詳しく聞き出す為に、説明の為の代官を何度か要求しています。虚偽申請対策¹⁵を怠らない当時の論功の

システムを明らかにする上で貴重なやり取りです。結果、惟親の活躍は無事認められました。また豊後の武士達の殆どは積極的に戦わなかった事が分かっています。守護大友氏による叱咤の文書が出るほどだったので、都甲氏の奮戦は県内でも珍しい内容の文書になります。

2度目のモンゴル軍襲来である弘安の役では、惟親は息子の惟遠これよおとともに肥前鷹島たかしまの戦いに馳せ参じています。鷹島は玄海町の西側に浮かぶ島で、文永の役の際には島民が全滅するほどの攻撃を受けたとされる場所です。弘安の役では、幕府が造らせた土塁石塁の効果もあり、モンゴル軍は殆ど上陸できず、御家人らの活躍と台風によって、モンゴル軍は大打撃を受けていました。歩調が合わないモンゴル軍の一部は、進軍も退却もできずに、激戦となった博多地域付近を逃れて、鷹島に上陸していました。それらのモンゴル軍の残党を一掃する為に行われたのが、鷹島の戦いでした。

都甲惟親・惟遠は、モンゴル軍が上陸を企てていた御厨半島みくりやの星鹿城ほしかに馳せ参じ、モンゴル軍が鷹島に上陸した事を知ると、東の浜から鷹島に上陸し、モンゴル軍を攻め立てました。鷹島の戦いに関しては、他の武士の活躍も多数文書に見えるように、日本側の優勢が続き、そのまま勝利に終わりました。

このように都甲氏は、2度の元寇の際に九州でも随一の活躍をした武士だったので。

元寇の際に活躍したのは武士だけではなく、日本各地の神社や寺院が異国降伏をスローガンに祈祷を行い、モンゴル軍を退けようとしたのです。

六郷山寺院では多くの寺院が祈祷に参加しました。もちろんその中には長安寺や天念寺も含まれています。長安寺の古文書の内容から流れを見てみると、弘安7年2月3日にまず関東御教書で、幕府から大友氏に豊後の寺社に祈祷をさせるように命令がありました。それを受けて大友頼泰は六郷山別当執行と六郷山僧にそれぞれ、御教書の内容を伝える施行状を発給しています。それによれば毎月どの寺院で、どのような祈祷を行ったかを知ることができます。

長安寺は鎌倉時代の初期に幕府の祈願所となっていました。この異国降伏の祈祷によって、さらに



元寇時の都甲氏の活躍

崇敬を集める事になります。他の六郷山寺院に關しても、寺院の目録が幕府に提出されるなど、知名度が高まっていきました。それにより、多くの六郷山寺院の規模が拡大し、仏神事の内容が向上したり、住僧の屋敷地などが拡大したりしたと考えられます。より組織的な活動が増え、鎌倉末頃より各六郷山寺院についての古文書が現われるようになり、各寺院の動きが見え始めます。中世の六郷山文化は、武士との結びつきによって大きく成長していきました。

15 虚戦（そらいくさ）と言って、虚偽の戦功を幕府に申請する事は、当時の社会現象の一つでした。

6、吉弘氏と都甲地域

鎌倉時代末期の都甲地域では、御家人都甲氏をはじめとする武士が多く活動していましたが、鎌倉幕府が力を失うと、倒幕に向けて多くの合戦が起こり、都甲氏らもそれらに動員されていきました。そうした室町時代の戦乱の中で、豊後大友氏や周防大内氏などの守護が力を付け、その力が広い範囲に及ぶようになりました。大友・大内両氏は室町時代から戦国時代にかけ、何度も戦い、時には協力しながら時代を生き抜いてきました。その国境は、現在の宇佐・豊後高田両市の境界線であり、高田・都甲地域は大友氏にとって対大内氏の重要な拠点となっています。

そういう時代背景のもと、大友氏が都甲地域に配置したのは吉弘氏でした。吉弘氏は豊州三老として知られる鑑理あまただまさや、石垣原いしがきぼるの戦いで華々しい戦死を遂げた統幸むねゆきなど、戦国時代には大友氏の重臣として活躍した一族です。

吉弘氏は大友氏の庶流、特に国東半島の名門田原氏と血筋が近い一族です。元々は武蔵郷吉広15（現国東市武蔵吉広）を本拠としており、現地には居城とした吉広城や、「吉弘楽」

で有名な楽庭八幡神社などに、室町時代初期の吉弘氏の足跡が残っています。

吉弘氏と都甲地域の関係を示す史料は、室町時代中期から見られるようになります。永享九年（一四三七）の「吉弘綱重安堵状」は、吉弘綱重が長安寺僧豪仁に常泉坊¹⁶の支配を認め、仏神事を滞りなく行うように指示したものです。ほぼ同時期に田染荘の運営にも携わっているので、この時期には吉弘氏が国東半島西部に進出していた事が分かります。同様に「六郷山長岩屋住僧置文案」では、不払いされがちであった長岩屋地区の夏供米の取立について、吉弘氏一族の六郷山執行豪経¹⁸（慶）らの定めた置文を追認しています。直前の永享七年（一四三五）の姫嶽合戦にお

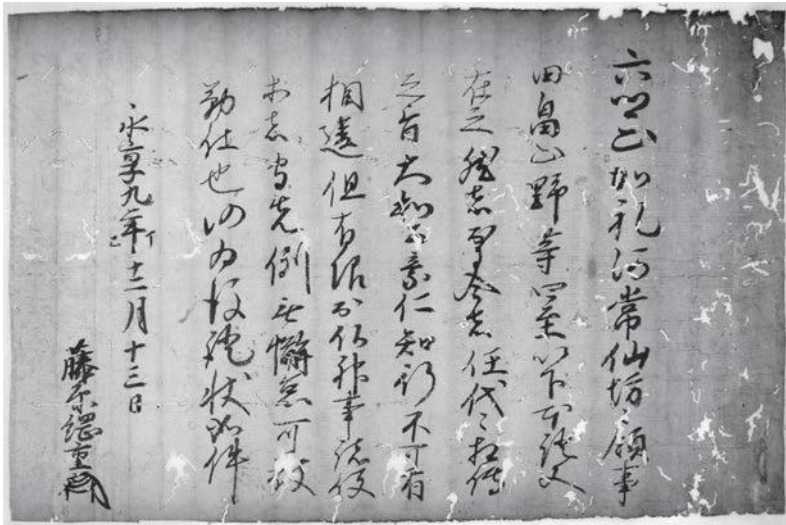


吉弘楽

いて、大友持直方に付いた都甲氏の所領が没収され、その闕所けつしょと考えられています。その都甲氏の闕所には、後に吉弘氏が住む松行名まつゆきみょうも含まれていました。

この後、都甲地域での吉弘氏の活動は長らく見られません、戦国時代に入ると吉弘氏が都甲地域を本拠地とします。史料が少なく、吉弘氏がいつ頃都甲地域に移ってきたか詳しくは分かっていませんが、吉弘親信もしくは氏直が当主だった戦国時代中期に移動してきたと言われています。吉弘氏の武蔵郷吉広での菩提寺である永泰寺には吉弘氏当主歴代の墓が残っていますが、親信のものまでが残っているためです。

この頃、大友氏は周防大内氏と多く合戦し



吉弘綱重安堵状

ており、筑前柑子岳城¹⁹や、豊前妙見岳城²⁰などで大規模な戦闘が行われ、寄藻川付近・立石・白野などの陸海の要所には、大友氏の兵士が配備され、玖珠の角牟礼城²¹が大改修されるなど、豊後北部は合戦一色の時代でした。

都甲地域も最前線地域の一つであり、吉弘氏や六郷山執行、都甲氏などが動員され、弱冠十九歳であったとされる吉弘氏の当主氏直は、大友・大内の一大決戦、勢場ヶ原合戦の総大将に任命されました。吉弘氏がいかに豊後北部の防御に重要な役割を期待されていたかが分かります。江戸時代に編纂された軍記物『大村陣勢場合戦記』^{おむらじんせいばかっせんき}によれば、氏直は大内軍が山路の行軍で疲れている時が好機だとして、本陣の大村山



勢場ヶ原の戦いの行軍図

の麓ふもとに広がる勢場ヶ原を進む大内軍に、援軍を待たずに突撃を仕掛けます。しかし、数で勝り、百戦錬磨の猛将すえまきふでせ陶興房を大将とする大内軍を攻めきれず、氏直は返り討ちに遭い、討死してしまいます。その後、立石の分隊が駆け付け、大内軍を退かせる事に成功し、両氏の国境線は元の豊前・豊後国境に落ち着きました。そして両家による合戦は、その後の朝廷を介した和睦わぱくによって終結しました²²。現在、山香町大村山には吉弘氏直とその家臣たちを供養する墓碑があります。

次に、都甲に入部した吉弘氏の活動について見ていきます。吉弘氏はまず長安寺を掌握する事により、六郷山寺院と密接な関係を築いていきます。吉弘氏は綱重の子である圓仲えんちゆうが執行しぎように任じられて以降、一族を多く六郷山寺院に送り込みました。そのうちに吉弘氏は長安寺の高い役職を歴任するようになり、鑑理・鎮信・統幸はみな六郷山別当や執行といった地位を手に入れていきます。これらの役職は、権威・権力共に非常に高いもので、都甲地域だけでなく、国東市の両子寺や香々地の靈仙寺など、六郷山寺院に広く影響力を持っていたと考えられます。長安寺僧としての吉弘氏の足跡は「六郷山年代記²³」などに多く残されています。六郷山執行職は現地の武士を利用したと考えられる武力を備えており、大友氏から戦時・築城の動員を受ける事がありました。六郷山寺院を支配下に入れる事は、軍事的な面で

も重要な事だったので。

少し広い範囲で史料を見てみると、吉弘氏は都甲地域周辺の地域における統括を行っていた事も分かります。家臣の分布や、活動の範囲を見れば、田染荘や香々地においても勢力を持っていた事が分かります。田染荘では吉弘氏の人物が、様々な問題に取り組んでいますし、香々地からは鉄の原料となる「きりかね」が吉弘氏に献上されたり、家臣の中に香々地出身の人物がいたりします（例えば、大力氏）。

本来都甲と呼ばれる地域は、都甲荘域内であり、現在の長岩屋・加礼河・屋山の範囲は都甲地域ではありませんでした。そのような中、吉弘氏の活動は都甲荘地域と六郷山寺院領を合わせて支配し、現在のような都甲地域という枠組みをつくりだしたと評価されています。また吉弘氏は大友家内部での高い地位を利用して、大友氏の中枢部と都甲地域とのパイプ役として活躍していたと言えます。吉弘氏は都甲地域に限らず、国東半島の広い範囲において強い影響力を持っていたのです。

松行にある金宗院きんそういんは、都甲地域にきた吉弘氏の菩提寺ぼだいじとして有名です。現在では本堂の基礎と、石造物群しか残っていませんが、都甲地域での吉弘氏の活動を考える上で非常に重要

な場所の一つです。

金宗院は室町時代中期頃に創始した寺院であると言われています。戦後には無住となつてしましますが、吉弘氏と同じ時代を生きた寺院です。本堂の基礎から、本堂には庫裡が隣接しており、国東半島の寺院によく見られる様式です。

本堂後背は墓地であり、多くの石造物が存在しています。その中には吉弘氏にゆかりのあるものが存在します。一際目立つ宝篋印塔は、統幸の供養の為に造られたとされていますが、戦後に盗難に遭い、現在は再建したものになります。その隣に並ぶ国東塔の中には、宗^{そうじん}侶（統幸の父、鎮信の法名）の名が刻まれているものがあります。他にも国東塔や五輪塔が多く残されており、ここに代々吉弘氏の当主たちが眠ったとされているのです。

16 長安寺の坊・現道脇寺。

17 毎年七月末に吉広地区で行われる太鼓踊り。江戸時代に都甲地域に伝わっていたものを、杵築藩の松平氏が武蔵吉広に持ち帰らせたと言われています。

18 室町幕府が和睦の命に従わなかったとして大友持直の領土を没収して、大友親綱に跡を継がせるようにした事を発端に起こった、大友氏最大の内乱。持直は敗れ、持直方についた家臣も多く力を失いました。

19 福岡市西区柑子岳にあった山城。大友氏にとっては筑前方面の重要な拠点の一つでした。

20 宇佐市院内香下にあった山城。宇佐郡の中心に築かれ、大内氏にとっては大友氏を見張るための重要拠点でした。この時期は大友氏が城を奪ったり、奪い返されていたりしていました。

21 玖珠町角埋山にあった山城。戦国時代に玖珠郡衆などによって大改修されました。

22 その後、大友氏と大内氏は長い協力体制になります。

23 六郷山学頭豪意が、江戸時代の初めに、六郷山の歴史が伝えられなくなる事を案じて編纂した年代記。その後の記述は書き継がれ、幕末まで続いています。豪意は当時90才で、戦国時代を長く生きており、

吉弘氏の影響も強く受けています。

7、戦国時代の都甲地域の英雄たち

吉弘鑑理（あきただ）（?～一五七二）

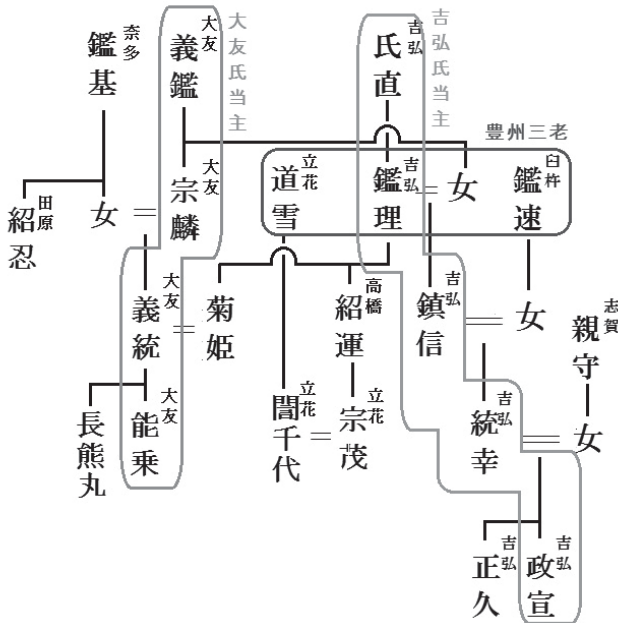
吉弘氏が都甲地域に本拠地を移して三代目、吉弘鑑理は大友氏の重臣「豊州三老（立花道雪・白杵鑑速・吉弘鑑理）」の一人として知られています。古文書を見てみると、鑑理は大友氏の政治の中心である衆議に参画し、決定事項を記した文書に署判をする加判衆²⁴として長く活動している事が分かります。ちなみに三老²⁵というのは史料用語で、二老（吉弘鑑理・立花道雪）としても古文書に登場します。

先代の氏直が勢場ヶ原^{せいばがはる}の戦いで討死した際、跡を継いだとされていますが、氏直は弱冠十九歳であったとされるのに対して、鑑理がその後すぐの文書に一度だけ登場する事から、氏直・鑑理の年齢や氏直と鑑理の関係については疑問が残ります。その後、十数年にわたって鑑理の活動はあまり見え、謎は深まります。

鑑理の加判衆としての活動が見えるのは、弘治年間（一五五五年～一五五八年）から永祿年間（一五五八年～一五七〇年）、病死する元龜二年（一五七一年）までの十五年くらいです。

特に永祿年間には重臣としての地位を確固たるものにし、立花道雪・白杵鑑速と三人で連署した書状が数多く残っています。鑑理は大友家の衆議に参加する重臣でしたので、府内の城下町にも拠点を持っていたと考えられます。

また鑑理は九州各地での活躍が多く見られます。外交では肥後相良氏^{さから}などとの折衝に活躍し、大内氏滅亡後に治安が悪化していた豊前・筑前地域における合戦でも大活躍しました。立花鑑載^{あきとし}の反乱²⁶で立花山城²⁷が毛利軍に奪取された際にも、立花道雪とともに城を取り返し、その後



戦国時代の吉弘氏系図

の城の改修にも携わっています。

もちろん都甲地域においても、積極的な活動が見え、当時の都甲地域の武士達の名前には、鑑理の「理」の字が付いている場合が非常に多いです²⁸。これは、鑑理が都甲地域の武士を被官²⁹にしたという事の表れだと考えられます。

元龜二年（一五七一年）鑑理は重い病にかかったようで、養生の甲斐なく命を落としてしまいます。この時、宗麟から鎮信への訃報を伝える文書が出ており、道雪・鑑速や各衆へ鑑理の死が伝えられた事と、鎮信への激励の言葉が書き綴られています。一畑の梅遊寺の位牌は年記を欠きますが、「前豫州太守（さきのよしゅうたいしゆ）（伊予守）」とあることから、伊予守を名乗った鑑理のものだとされています。

吉弘鎮信（しげのぶ）（一五四〇〜一五七八）

鑑理の死後、吉弘氏の跡を継いだのが子の鎮信でした。鎮信は幼少の頃より宗麟の傍に仕えており、妹が大友義統（宗麟の子）の正妻であった事から、宗麟との親交が深かったと伝えられます。鎮信は加判衆などといった重臣層にはなりませんでしたが、様々な場面で重用されました。『大友興廢記』などの軍記物では、各所の戦いで活躍した猛将として描かれ、

鎮信もまた都甲地域の英雄の一人でしょう。

鎮信は天正五年（一五七七年）に国衆であったという記述が古文書に見えます。この国衆という身分に関しては様々な研究がなされてきましたが、大友氏における国衆は広い地域の武士をまとめる大友氏一族の有力家臣と考えられています。鎮信は田原宗亀らと一緒に豊後北部の武士（北浦^{きたうら}辺衆^{べしゅう}）をとりまとめ、豊後国北部一帯の大友家臣を広く統括していたと考えられます。

外交関係では、鑑理に引き続き相良氏、そして博多方面の取次を行っていたと考えられます。鎮信は博多の豪商島井宗叱^{そうしつ}への使者として幾度か派遣されており、宗麟所望の名物「なら柴」を手に入れるべく宗叱を説得する役目も担っています³¹。他にも立花道雪の立花山城督任命の際にも使者となっており、博多地域と府内を往復している様子が分かります。鑑理の死後、鎮信は道雪と一緒に立花山城の整備の任も引き継いでいたと考えられますが、道雪が城督に任命されると家臣の一切を引き上げました。

鎮信は鑑理と比べ、都甲地域での活動が多く見られます。長安寺が六郷山の歴史をまとめた「六郷山年代記」によれば、大檀那と呼ばれた鑑理とは違い、六郷山の執行や別当に就いて寺院経営にあたりました。法体になったのは永祿年間後期と推定でき、法名は「宗鳳」、

後に「宗叅」と史料に見えます。「六郷山年代記」には、源鎮信「公」と称され、本堂の傍にある鎮信の宝篋印塔にも宗叅「公」と銘がなされています。これだけ見ても、鎮信が六郷山や長安寺に与えた影響は非常に大きかったと考えられます。

鎮信が当主だった時代は、立花道雪らの活躍により九州北部は比較的安定した状況になり、大友氏は南方の日向侵攻へと方針を転換していきます。しかし、日向には大友氏より先に薩摩の島津氏が入部しており、大友氏は島津氏に戦いを挑むこととなります。これが有名な日向高城（たかじょう）（耳川）の合戦で、鎮信は北浦辺衆を率いて出陣する事になります。大友軍は日向高城に迫りましたが、序盤から死闘を強いられました。鎮信は高城に



耳川の戦いの行軍図

あつた小屋などを破壊する軍功を立てていますが、与力被官は負傷し、中には戦死者も出ていたようです。そして、天正六年（一五七八）十一月十二日、島津氏の得意戦法釣野伏つりのぶせにかかった大友軍は壊滅し、吉弘鎮信・臼杵鎮続ら大将格の武将が次々と討死して、大友軍は退却しました。

都甲地域でも都甲宗甫そうほや諸田土佐守の子など多くの戦死者を出し、「日向後家ひゅうがのごけ」と呼ばれた戦死者の後家（残された妻）達に対する補償が行われるなど³²、慌ただしく動いていた様子が見て取れます。鎮信の供養塔としては、長安寺本堂近くの宝篋印塔（七回忌の時のもの）、金宗院五輪塔などが残っており、位牌は現在梅遊寺に残っています。

高橋紹運じょううん（一五四八〜一五八六）

高橋紹運も名字こそ違いますが吉弘氏



高橋紹運肖像画
(天叟寺蔵、柳川古文書館写真)

一族の人間です。紹運は吉弘鑑理の子で、高橋と名乗る前は吉弘鎮理という名前で登場します。紹運は都甲地域で生まれたとされており、「六郷山年代記」によれば、元龜三年（一五七二）には吉弘氏当主のように六郷山執行を勤めています。年代記の中では、「高橋殿」と表記されています。

高橋氏は宝満城ほうまんじょうを本拠とする大友氏家臣の一族でしたが、当主鑑種が立花鑑載の反乱に呼応して大友氏に反旗を翻し、結果として滅ぼされました。空き城となった宝満城・岩屋城は北西の防衛上重要な拠点でしたので、宗麟は信頼する吉弘氏の間人を選び、鎮理はこの時高橋氏の通字「種」を貰って、高橋鎮種と名乗り、後に法体となって高橋紹運と名乗ります。

兄の鎮信が戦死した日向高城の戦いの際には、大友領でも大きく張り出した岩屋城が筑紫広門33・秋月種実らに狙われました。この時、紹運は援軍もなしに岩屋城を守りぬいています。また、紹運は同じ筑前に領土を持つ立花道雪と非常に親交が深く、九州北部の多くの合戦には一緒に参加しており、連署による古文書も多く見つかっています。紹運は道雪と近づくことで、軍事的にも、政治的にも大友氏の第一線で活躍できるような素地を作り上げていったのです。

そして、現代において高橋紹運の名を世に知らしめているのは、何ととっても岩屋城の戦

いす。日向高城での大敗の後、大友氏の勢力は薩摩島津氏や肥前竜造寺氏の勢力拡大に伴って急激に縮小していきました。筑前方面の戦いも立花道雪が存命の内は善戦していましたが、道雪の死後は厭戦えんせんの雰囲気えんせきが広がり、地理的にも孤立していきました。

高橋紹運は島津氏との戦いの中で岩屋城を死守せよとの命令を宗麟より受け、僅か七六三人の兵士で、数万の島津氏に立ち向かい、半月ほどで全員玉碎したと言われています。島津方の死傷者は三〇〇〇人とも言われ、その立て直しに時間を要した為、島津氏の博多方面への進軍はかなり遅れたと言われています。現在岩屋城址には、紹運の墓（胴塚）と慰霊碑34があります。

立花宗茂（一五六七〜一六四三）

立花宗茂は高橋紹運の嫡男です。つまりは吉弘統幸の従弟にあたります。柳川



立花宗茂肖像画
（福厳寺蔵、柳川古文書館写真）

城主として著名な戦国時代の英雄ですが、その前半生は謎に包まれています。出生は都甲の箕城、幼少の頃は都甲地域や高橋氏の居城などにいたとされています。元服した時の名を高橋統虎といたしました。

高橋紹運が道雪と親交が深かった事は述べましたが、この事は宗茂が立花姓を名乗る事と深い関係があります。道雪には男児がなく、娘の閨千代に多くの刀・槍、そして立花城督を譲るといふ戦国時代でも稀な手続きが行われていました。しかし閨千代はその頃七歳と推定され、道雪に代わって立花山城を経営できそうにはありませんでした。そして道雪は深い交友関係にあった紹運の子である宗茂を後継者に選んだのです。こうして宗茂は立花家の婿養子に入り、立花姓を名乗る事になります。宗茂も紹運同様に、道雪との関係を活かして、戦国末期の大友氏の政務に積極的に携わり、戦だけではなく政治の面でも大いに活躍しました。立花氏の跡を継いだ後、宗茂は立花山城にいました。立花山城は大友氏の博多での権益を守る為の非常に重要な城であり、永禄年間に祖父鑑理や義父道雪によって改築がなされた大規模な山城です。道雪から閨千代へ出された讓状によれば、立花山城には武器や兵士、兵糧が常に奉行によって調達され、大砲までもが設置されていた事が分かります。またその讓状には、城の定期的な修理に関する記述があり、当時の城郭の経営を知る上で非常に貴重な史

料です。

高橋紹運の家臣には、屋山氏など都甲地域の人物と推測される者や、滅亡した高橋氏の旧臣が多くいました。それに対して立花氏の跡を継いだ宗茂には、小野氏・由布氏といった道雪が選び抜いた強力な家臣団がいました。

島津氏との戦いの中で、宗茂は立花山城の防衛の任につきまます。岩屋城の戦いで消耗していた島津軍は、原田氏・秋月氏に命令して攻撃を仕掛けますが、宗茂の活躍はめざましく、島津軍の被害は更に甚大なものになりました。

豊臣秀吉による九州平定が行われた際に、宗茂はその実力が認められ、豊臣姓を下賜されています。その為、朝廷との公式な文書の際に「豊臣宗茂」という署名も残っています。

宗茂は文禄・慶長の役でも、各所で多くの軍功を挙げます。文禄の役の途中からは、吉弘統幸もその配下に加わって戦った事が様々な史料から分かります。

宗茂は秀吉との関係もあり、関ヶ原の戦いでは西軍につきました。宗茂は大軍を率いて京極高次の立て籠もる大津城を攻めましたが、これに苦戦して結局関ヶ原に駆けつけることはできませんでした。その後宗茂は、西軍についた事を責められて一時は改易となりますが、元和六年（一六二〇年）にその実力を認められて柳川藩主に返り咲きます。その後は相伴しょうばん

衆として徳川家光などに近侍し、江戸に住む生活をしていました。宗茂は東上野に三つの屋敷を持っていました。その一つ下屋敷の敷地内には宗茂が母宋雲尼の守本尊として太郎稲荷神社という神社を建てました。この神社の名については、吉弘氏が都甲地域で崇拝した太郎天と関係が深いと思われまゝ。江戸時代には参拝ブームもあつた立派な神社でしたが、現在では場所も移転し、建物の間にひっそりと立っています。

24判とは、花押（サインのようなもの）の事で、古文書の最後の部分を見ると加判衆がズラリと連署しています。

25実際に古文書や古記録にあらわれる言葉のことです。

26鎌倉時代に立花山城を築城した大友貞載の子孫にあたる鑑載が、一五六八年に毛利氏の要請に応じる形で挙兵しました。二度目の離反であつた為、戦後鑑載は死罪となりました。

27大友氏の博多での拠点となつた巨大な城郭。

28夷谷の大力理持が古文書に見られ、綾部理昌は博多櫛田神社の梵鐘銘に見られます。

29 武士の身分がはっきりしたもので、上級の武士に仕えるものを被官と呼ぶ場合が多いです。別個に
関係を結ぶので、上下の関係が強くなります。この頃、綾部氏や大力氏、諸田氏、舌間氏などが被
官となったと考えられます。

30 宗室とも言います。

31 なら柴は天下三肩衝と呼ばれ、將軍や信長も手に入れようとした程の名物でした。結局宗叱に断られ、
交渉は、うまくいきませんでした。

32 都甲地域では都甲宗甫後家に対する補償が行われた事が古文書より分かります。都甲宗甫の供養塔
と見られる異形国東塔が払田に残されています（天正六年の銘）。他にも天正六年十一月に討死した
者の位牌・板碑などが都甲地区には散見できます。

33 元々は少弐氏の家臣でしたが、主家滅亡後は大友方に付いていました。しかし大友氏の影響が弱く
なると度々宝満城・岩屋城などを攻撃した人物です。

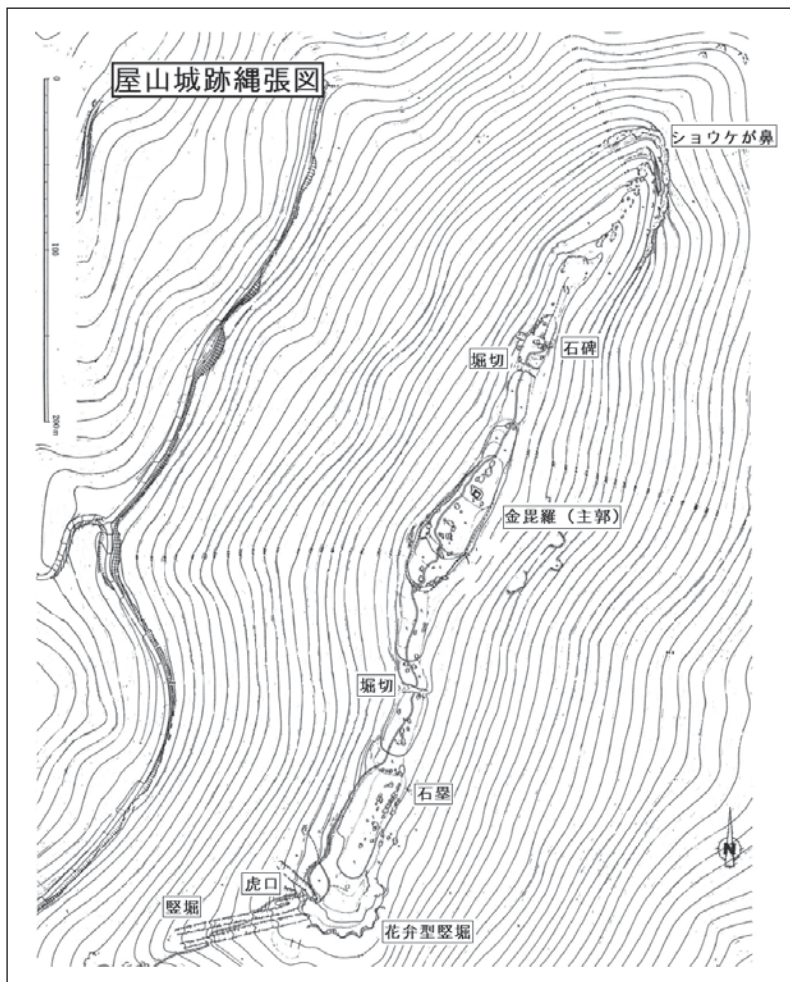
34 首塚と言われる場所は、福岡県筑紫野市の般若寺跡に残されています。

8、吉弘氏と屋山・笥城

屋山城は豊後高田市内では、最大規模を誇る山城です。標高は543mですが、麓との高低差は450mもあり、独立峰のため眺望がよく、地域一帯を見渡すことに適した城です。城の全長は400m程で非常に細長い形をしており、段差のある多数の曲輪くわによつて構成されています。これを連郭式山城れんかくしきといいます。同じ形式の城郭としては、楠木正成くすのきまさしげが築城した千早城ちはや³⁵などがあり、非常に堅固な造りをしている事が分かります。屋山城は詳細な縄張図なわばりず³⁶が作成されているので、それを元に少し城跡を詳しく見てみましょう。

虎口こぐち（城の入口）は細く捻じれていて、尾根の両脇には堅堀が掘られています。その尾根以外の部分は非常に急勾配で、敵兵はその間の狭い道を進まなくてはならず、一度に大勢で攻め寄せる事はできません。しかも城に登る事ができる唯一のルートであるこの部分も、急な坂道で、長く、直線である為、登ってきた敵兵はかっこうの的になってしまいました。

一般的に城郭には、石垣や土塁の崩落を防ぐために細長いスペースが設けられており（犬走り、または武者走りと言います）、屋山城にも周りを大きく囲むように犬走りが存在します。



犬走りには人が侵入できるほどの大きさがあり、城郭にとって大きな弱点になります。屋山城には敵兵が虎口を避けて犬走りに侵入しても大丈夫なように、その対策がなされています。

まず虎口の側面に花卉型の豎堀が施されています。この造りは市内・

県内の他の城郭（大規模な遺構であれば烏帽子岳城³⁷や妙見岳城³⁸など）にも多く見られるものですが、屋山城の城郭は狭く、登城可能な尾根が一方方向のみの為、虎口付近のみに花弁型の豎堀が見られるという特徴があります。更に犬走りに侵入した敵兵をしとめるべく、虎口近くの左右には曲輪（兵士を配置する平面のスペース）が張り出しています。これらの工夫により、屋山城は弱点を克服しているのです。

城全体を見ると、同じくらいの大サイズの曲輪が連続していますが、北側に向かって標高は次第に高くなり、その中央と北端には堀切と呼ばれる深い堀が設置され、その内側（北半分）が中心的な曲輪であると評価できます。それに対して南半分は虎口や犬走りを防御する為の曲輪群であると評価できます。

主郭（本丸）という最も重要な曲輪は、北半分の中央付近と考えられています。この部分は周りの曲輪との高低差が特に大きく、犬走りができるほど急になっています。屋山城の北端は崖になっており、堀切も設置されている為、簡単には登れないようになっていきます。

屋山城に関する文献・史料は多くありません。その為、いつ頃に築城されたか、いつ頃に吉弘氏が移ってきたか、詳しくは分かっていません。吉弘氏の前の本拠地である武蔵吉広に吉弘氏歴代の墓が、親信の代までしか残っていないことや、大内氏との一大決戦である

勢場ヶ原合戦（杵築市山香町）における総大将に吉弘氏直が選ばれている事などから、戦国時代中期までには吉弘氏の本拠地は都甲に移動していたと言われています。

また戦国時代末に屋山城の城郭は吉弘統幸によって整えられた事が分かっています。天正七年（一五七九年）の大友義統の書状を要約すれば、「屋山城の改修について、統幸が油断なく行っているのは随一の働きである。日々気を緩めない事が大事である。」とあり、城の整備は順調に進められたようです。また同じ書状には、大友義統が統幸に火縄銃を送ったことが書かれており、軍事上の拠点として屋山城が充実していったことが分かります。城の規模が違ふ為、直接の参考になるか



屋山城（虎口の堅堀付近）

は分かりませんが、立花道雪から娘の閨千代ぎんちよに宛てられた博多の立花山城の軍備に関する讓状39によれば、米や武具など戦に必要なものが担当の奉行によつて備えられていた事が分かります。

この頃に屋山城の軍備が拡張された原因は、佐野鞍懸城くらかけの田原親貫たわらちかつらの反乱です。耳川の合戦に敗れた大友氏の求心力が一時的に弱まり、国東半島の名門田原氏は大友氏に反旗を翻したのです。統幸はこの田原氏との抗争の中でいくつかの軍功を挙げ、感状を授かっています。都甲地域にはもう一つ吉弘氏の城郭が残っています。吉弘氏が普段住んでいたとされる寛城かきいです。その遺構はいまだ発見されておらず、現地に残った伝承と地名だけがその存在を伝える幻の城です。具体的には現戴星学園たいせいの近くの「ホリノウチ」という地域や、吉弘氏の菩提寺である金宗院の西側の「大屋敷」という地域が、候補地になっています。吉弘統幸が伊勢参りを行った時の記録によれば、統幸は松行村に住んでいた事が分かっていますが、松行村の境界線が現松行と同じとは限らないので、候補地がいくつも残っているのです。

寛城は屋山城のような山城タイプの城郭ではなく、平地に造られた大規模な御屋敷のようなものと考えられます（大内氏の山口館やまぐちやかた⁴⁰）。土塁や堀など、防御施設も備えられたと考えられますが、基本的には戦闘を行う場所ではなかったと考えられています。戦国時代にはこ

のように、普段住んで政治を行う城（屋敷・館）と、合戦時に籠る城（詰めの城）とが分かれていた例も多く、屋山・箕両城はその典型とも言えます。

35 現大阪府千早赤阪村にある楠木正成の詰めの城。断崖絶壁の中に作られた堅固な山城として知られています。

36 城跡の様子を地図に書いたもの。

37 田染荘を見張る古庄氏の山城。花卉型堅堀の遺構が大きく残っています。

38 現宇佐市院内にある大内氏の山城。宇佐地域を広く見渡す巨大な山城で、花卉型堅堀の規模もかなり大きいです。

39 土地や物を人に譲る時に書く古文書。

40 現山口県山口市にある大内氏の館。室町時代から館を中心に武家や公家を集住させた大規模な城下町であった。

9、吉弘統幸と石垣原の戦い

吉弘鑑理の病死の直後、その訃報を鎮信に伝える古文書がある事は紹介しましたが、その時に鎮信の子と思われる松市という人物が、国衆に准ずる待遇を許されたという内容が出てきます。この松市こそが吉弘統幸⁴¹であるとされています。

この時代の国衆というのは、大友氏庶流の武士でも有力なものに与えられた身分であり、担当地域の武士をまとめあげました。特に豊後国を南北に二分して、北浦辺衆・南郡衆と呼ばれましたが、吉弘氏は田原氏と一緒に北浦辺衆にあたります。この時の統幸の年齢を没年から計算すると僅か八歳であり、極めて異例だった事が分かります。鑑理の功績の大きさと、吉弘氏の厚遇ぶりがうかがえます。

耳川の戦いで鎮信が討死した後に、統幸は吉弘家の家督を相続します。統幸の最初の大仕事は、屋山城の改修でした。前年の耳川の合戦に敗れ、劣勢となった大友氏の家臣には、主君を裏切り独立しようとするものが現われました。その筆頭が、鞍懸城（現豊後高田市佐野）の田原親貫^{ちかつから}です。統幸は田原氏対策の最前線の城として相応しいように屋山城の整備を行っ

たのです。その後、史料で確認できるものだと、統幸は田原親貫の乱の平定・下毛郡（現中津市付近）で発生した悪党の撃退において軍功を挙げています。

屋山時代の統幸は非常に仏神事を大切にしましたという事が分かっています。統幸が六郷山の権執行・権別当に任命されていた事は前に述べましたが、それらの役

目についた統幸は災害などに見舞われた六郷山寺院の復興を行っています。『六郷山年代記』によれば両子寺（国東市）の大講堂・食堂の再興も行ったようです。また、六郷山に対して願文⁴²を提出しており、「忝なくも六郷山の権別当となったが、今世は、主君の命に従って



吉弘統幸石垣原合戦出陣図（室利則氏所蔵）

法体を改めて天に運を任せて、身を国家に投じる」という趣旨の文章が見受けられます。

秀吉の九州平定の後、豊後国にも束の間の平和が訪れます。その際、統幸は伊勢参り⁴³をしています。参宮を仲介した別府朝見八幡宮の参宮者覚書にも「都甲まつゆき村の吉弘加兵衛尉」が参宮したという事を示しています。さらに翌年には、統幸の息子も伊勢参りに行っているようで、統幸の信心深さが分かります。

統幸はこのような生活を送っていましたが、九州の平和は長くは続きませんでした。秀吉が朝鮮半島や中国大陸への派兵を決定したのです。統幸は大友義統の軍勢として文禄の役に参加し、大友家文書録綱文⁴⁴や軍記物には、その時の吉弘統幸の活躍が示されています。大友義統が誤報を信じて鳳山城^{ほうざんじょう}から逃げ出した際、「敵兵の軍旗も見ずに退却するのは武士ではない」と兵士を奮い立たせたとあります。結局義統は敵前逃亡してしまい、その報せを聞いた秀吉の怒りによって四〇〇年以上続いた大友家は改易処分となります。大友家文書録断簡によれば、統幸は関東御供と付記され、義統が関東へ蟄居した際に供奉したとされています⁴⁵。

大友家改易後、統幸は従弟の立花宗茂の下に身を寄せます。立花宗茂は既に秀吉の信頼を受け、大友家から独立して柳川に領土を持ち、文禄の役にも独自に兵士を派遣していました。

統幸は二千石の禄を貰う重臣格として迎えられています。立花家での活躍は古文書などからは殆どたどれません。その後の朝鮮の役では、矢島重成と共に四番隊を任せられ、秀吉からその活躍を賞されて「皆朱の槍」^{かいしゅ}を授かったとされています。代々吉弘氏の家臣だった室氏の子孫の室利則さん所蔵の「吉弘統幸石垣原合戦出陣図」でも、出陣前の統幸に室理清左衛門が近侍し、皆朱の槍を立てています。

慶長三年（一五九八）、豊臣秀吉が逝去した事により、天下は秀吉の子である秀頼を立てる西軍と、家康がまとめた東軍に二分されることとなります。翌年に秀吉によって幽閉されていた義統は解放されます。その二年後、義統は西軍として別府に挙兵し、石垣原の戦いが繰り広げられるのですが、合戦までの経緯は従来大友家文書録綱文や軍記物に詳しく記述がありません。

家康に預けられていた大友能乗（義統の子）に協力する為に江戸に向かっていた統幸は、上関（山口県）で西軍に付く事を決めた主君義統と再会します。石田三成や毛利家に説得され、人質に寵愛する息子の長熊丸まで差し出してしまった義統を、統幸は西軍に付いても益無しと説得します。しかし、その甲斐なく義統の意志を覆す事はできませんでした。統幸は江戸に渡る事を断念し、義統と共に死ぬ事を選び別府へ向かったというものです。

しかし、この内容は不可解な部分がいくつかあります。

まず、統幸はその頃義統と連絡を取り合っていました。古文書によれば、統幸は義統幽閉時から見廻として義統の配所を訪れていますし、義統が牛込の能乗邸から京都に出発した際にはその翌日に、義統が増田長盛から大坂に屋敷を授かった際にも引越しの直後に、統幸宛に文書が出されており、その文書の尚々書^{なほなほがき}₄₆の部分から統幸からも文書が送られていた事が分かります。つまり統幸は柳川に居ながら関東・近畿地方にいた義統と綿密な連絡を取っていたのです。そのような状況で合戦に赴く際に、連絡がなされなかったとは考えにくいのです。

また大友能乗は牛込で家康の預かりとはなっていました。殆ど蟄居の状態で、軍事行動を起こすような状況ではありませんでした。一方の義統は所には大友家再興の機運が高まり各所から警護として旧臣が集まり、数十名の家臣が駆け付けています。岐部元達、竹田津一本ら側近の武士だけではなく、岡藩からは田原紹忍や宗像鎮統、他にも小田原統直、白杵市兵衛尉、若林甚内允、富来太郎兵衛尉などといった武士が駆け付けています。更に主君である立花宗茂も西軍に付き、息子の政宣も寛永の頃まで宗茂に仕えています。

統幸が忠義に厚いという事には変わりありませんが、義統と統幸が偶然にも上関で会っ

て、合流して西軍として挙兵するというストーリーは軍記物の創出だったのかもしれない。

統幸はかつての主君義統に従い、船を別府まで出して国東半島南部の攻略を行います。しかし中津城の黒田官兵衛が大友氏撃破の為に数倍とも言われる軍勢で別府に向かっていく事を知ると、石垣原を見渡せる別府坂本村古屋こやに陣を張って黒田軍を迎え撃ちました。これが世に有名な石垣原の戦いです。

大友軍は少勢でしたが、軍記物によれば統幸むなかたかみんや宗像掃部の奮戦によって一時は黒田軍を追い詰めましたとされています。しかし宗像掃部をはじめとする武将五十四人が討たれ、最後は統幸も切腹か討死してしまいます。大



石垣原合戦場（吉弘統幸の陣所跡）

友家文書録綱文の記述では、文禄の役以来の旧知であった井上九郎右衛門之房ゆきふさとの激しい一騎討ちの果てに討ち取られたとされています。軍記物での統幸の最期の記述は様々なものです⁴⁷。その後、吉弘統幸の勇猛さは現在に至るまで様々な形で語り継がれています。

大友義統が戦後に書いたとされる戦死者の注文には、「吉弘加兵衛尉」の名が最初に記されています。黒田方の史料においては、最初は岡藩から抜けて義統に与した田原紹忍・宗像掃部の問題が多く書かれています。戦後には「吉弘・宗像両者を討ち取った」というように統幸の名前が見えるようになります。それらの事からも合戦における統幸の戦功は著しかったと考えられます。



石垣原の戦いを描いた「本村天満宮の天井絵」

41 統幸は古文書では「加兵衛（尉）」「賀兵衛（尉）」などの標記もされます。「かひようえ（のじょう）」と読みます（ひらがなで「かひやうへ」と書かれた古文書も存在します）。

42 神仏に祈願する時に書きあげる文書。

43 伊勢神宮の天照大神は大日如来と一体であったと考えられており、統幸も仏教的探究心から伊勢参りをしたと考えられます。

44 大友義統がまとめた大友家文書録に、文書に関係する時代の説明や、事件の経緯を江戸時代にまとめて表記されたもの。

45 事細かに供奉した人員の名前を連ねた交名によれば、吉弘統幸の名はなく、大友家文書録構文には「臼杵主税助統幸」という書き損じと思われる内容が見られます。

46 今日の手紙で言う所の追伸のようなものです。

47 自害するものや、井上之房と一騎討ちをするもの、井上家臣の小栗治右衛門に討ち取られるものなど様々です。

10、吉弘統幸の伝説

吉弘統幸は石垣原合戦で勇猛果敢に戦い、その姿は様々な所に伝説として残っています。

吉名川悲話（都甲の伝説）よしながわ

吉弘統幸は、石垣原合戦で敗れたのちに、獄門台でさらし首にされました。

大友義統の敗戦を聞いた吉弘氏の菩提寺金宗院の住職は統幸の菩提を弔うために、統幸の首を石垣原へ取り戻しに行きました。住職はやつのことで統幸の首を奪取します。

金宗院の住職は涙ながらに統幸の首を背負い、鹿鳴越かなごえから奥畑を通り、やつとの思いで都甲の松行までたどり着き、長岩屋川で統幸の首を洗おうとしました。すると統幸の目がカッと開いて「ああ、住職、よしな」と話したのです。

住職は驚いて首を洗うのをやめて、寺に持ち帰って厚く供養をしました。それから都甲川の金宗院近くの流域を「よしな川（吉名川）」と呼ぶようになりました。

金宗院には吉弘統幸の墓とされる宝篋印塔ほうきやくとうがあります⁴⁸。笠には「統運寺殿」と銘なづながあり、

塔身には「三十七歳」「九月十三日」の銘があり、石垣原合戦の日時に一致します。

下馬の松の伝説（別府の伝説）

別府の吉弘神社は、石垣原合戦で討死した吉弘統幸を祀るために造られた神社です。同神社は石垣原の北側、細川の陣があつた付近に造られました。こちらの神社にも統幸の墓が存在します。また江戸時代には石祠しかなかったものが、大正時代に現在の拝殿が造営されました。

吉弘神社の統幸の墓のそばには、松の大木があります。一般人はおろか、一国の太守でさえ乗馬したまま松をくぐると災いが起こると言われており、必ず下馬をして通り過ぎ



金宗院の吉弘統幸の宝篋印塔

たと言います。それ以来この松を「下馬の松」と呼ぶようになりました。

吉弘神社に詣れば、猛将統幸の威力でどんな病気もたちまちに平癒すると言われている。す。

屋山城の最後（都甲の伝説）

慶長六年（一六〇一年）に石垣原合戦を終えた黒田官兵衛が国東半島を平定するため合戦を続けていました。黒田軍が都甲地域を通りかかると、かつての吉弘氏の居城である屋山城が降伏をせずに戦闘態勢をとっていました。

この城には吉弘統幸の未亡人が旧臣を引き連れて立て籠もっていました。統幸の未亡人は必死に応戦しましたが、黒田の大軍を前に屋山城はすぐ落城し、残酷にも処刑されました。この時に屋山城は廃城となりました。

この話も、どうやら伝説のようです。黒田官兵衛は確かに国東の武士を平定していききましたが、屋山城に関する文書は見られず、統幸は立花宗茂の柳川に身を寄せていたので、そのまま空き城になっていたのではないかと思われれます。

室理清左衛門の最期（別府・国東の伝説）

室氏は吉弘統幸の家臣として古文書などにも登場する人物です。江戸時代に描かれた鎧姿の吉弘統幸。その隣に仕えているのが、吉弘統幸最後の家臣、室理清左衛門です（五九頁）。室理清左衛門は、石垣原の戦いで吉弘統幸が討たれた後、吉弘氏の元々の本拠地である現国東市武蔵町吉広に戻ります。

しかし、理清左衛門のこの行動は、戦場から逃げ帰ってきた訳ではなく、再興を掲げた大友氏の悲しい顛末を統幸に伝える為であったのです。

現吉弘神社に、統幸の墓といわれる墓碑がありますが、それは細川氏によって建てられたものです。理清左衛門は合戦から一年後に別府を訪れ、大友氏の



室理清左衛門の墓

最期について統幸に伝えた後に、そこで自害したと言われています。

吉弘神社の統幸の墓のすぐ近くに、今でも理清左衛門は眠っています。

48 統幸の宝篋印塔は戦後に盗難され、今の塔は再建されたものです。

11、都甲地域の中世石造物をめぐる

これまで十章にわたって都甲地域の歴史について解説してきましたが、この章では都甲地域の石造物を丸ごと紹介します。ここを見て都甲地域の魅力ある石造物を是非自分の足でめぐってみてください。

都甲地域の中世石造物はその多くが室町時代から戦国時代にかけてのものであり、鎌倉時代のものとされる大型の国東塔も残されています。各地域の中世墓地には、五輪塔を中心に多くの石塔が集まっている場合が多く、国東半島特有の板碑や自然石碑などが隣接して立っている場合も多いです。

中世に造られた石造物の中には、銘が彫られている場合も多く、そこから年代・願主が分かる場合も多いです。例えば「天正六年十一月十二日」とあれば、耳川の戦い戦死者の石造物である事が分かります。

○一畑地区

①梅遊寺

一畑の奥まったところに建つ梅遊寺は、吉弘鑑理・鎮信の位牌が残されているなど吉弘氏との関係が深い寺院です。その墓地には近隣の寺院から集められた天台宗の信仰と関係が深い石造物が多く残っています。

その中でも一際目を引くのが、梅遊寺板碑です。三基の板碑が県指定文化財となっており、多くの銘文が刻まれており、作られた時期を特定できることが特徴です。

「普賢種字板碑」には建武三年（一三三六）の銘があり、都甲地域ではとりわけ古い板碑です。他の二基と比べ縦に長く、中央に大きく種字を刻む典型的な板碑です。「十三仏種字板碑」は応永二十一年（一四一四）の年記を刻むものと、墨書が薄く見えるもの二基がありますが、国東半島に十三仏信仰が伝播した初期の板碑であると評価されています。どちらも幅が広く大型の板碑です。

②大内観音岩屋

並石ダムから奥へと進んでいくと、小さな駐車場があり、その奥には多くの石仏が出迎えてくれます。そこからずっと奥へ、階段を歩いて上ってゆくと、大きな岩屋の中に木造二階

建ての覆屋が見えてきます。

階段を上ると岩屋の中が非常に広いドーム型になっている事がわかります。そしてそこにも多くの石仏がズラリと並んでいます。

岩屋の前には、一基の宝篋印塔が建っており、六郷山寺院の影響を強く受けていると評価できます。

○加礼川地区

①三嶋社

三嶋社は中世以前は虚空蔵岩屋とよばれた六郷山の岩屋の一つでした。戦国時代から江戸時代にかけて作られたとされる五輪塔・自然石碑が参道に集まっています。江戸時代のものではありませんが、加礼川地区で活動した大庄屋河野氏の墓地もあります。

河野氏は江戸初期頃に、杵築から山を越えて田染・都甲と移動してきた一族で、それぞれ三嶋社をつくっています。伊予の河野水軍の末裔だという伝説もあります。

②道脇寺

道脇寺は長安寺の中心的な坊の一つである常泉坊が寺院化したものです。吉弘氏と都甲地域の関係を示す最古の史料の一つである「吉弘綱重安堵状」にも登場します。「天正五年」「豪仁大徳」の名が刻まれた無縫塔や、長安寺領の開発に大きな役割を果たした「応仁」の無縫塔（実際には江戸時代につくられた）が残されています。

また、近くにある大歳神社も鎌倉時代の古文書に登場する歴史のある神社で、宇佐神宮の神官による整備が近代まで行われていました。

③長安寺

屋山の中腹に作られた長安寺は、中世には中山本寺の惣山という地位にあった六郷山寺院の中核的寺院です。国指定重要文化財である木造太郎天像や銅板法華経などの美術品もさることながら、大型で古い石造物が多く残されている場



長安寺国東塔

所としても有名です。

身濯神社の前に建っている国東塔は、市内でも最大級の国東塔で、国東塔が考案された鎌倉時代末の様式を各所に残す名塔です。

長安寺本堂横にも多くの石塔が建っており、吉弘鎮信の法名「宗侶」の銘の入った市指定の宝篋印塔（天正十三年）や、同じ頃鎮信の活躍を「六郷山年代記」に記した「豪意」の無縫塔が並んで建っています。

本堂前の石段を下ると、鳥居まで参道が伸びており、その両側には坊々が広がっていた事が分かっていきます。中でも参道から見える「オト様板碑」には慶長十五年（一六一〇）の銘と法名がいくつか彫られています。

○梅ノ木地区

①庵ノ迫板碑

庵ノ迫板碑は「正中二年（一三二五）」の銘を持つ都甲地域では最古の板碑です。そこ一帯は庵ノ迫という名前から、仏教関係の庵があったと想定できますが、現在も残る少し離れたところの薬師像を本尊とする御堂があり、それを庵と呼んでいた可能性があります。

板碑の周りにはいくつもの国東塔・宝篋印塔などの残欠や、近世墓碑がかなり多く残されており、地域の人に継承され続けてきた墓地景観が見られます。

②ゆずりは両面板碑

梅ノ木と田染路（陽平方面）を結ぶ県道沿いにひっそりと建っている「ゆずりは両面板碑」は、両面に額をつくり、三つずつ種字を施す珍しい物です。県指定文化財になっています。

○新城地区

①長賢寺

長賢寺は屋山の麓、新城地区に開基した浄土真宗の寺院です。慶長の頃に成立したとされますが、長賢寺の裏にある九文代石塔群には、室町時代から戦国時代にかけての五輪塔・国東塔・宝塔が集まっており、それ以前から宗教的空間が存在していたことが指摘されています。

○長岩屋地区

① 天念寺

天念寺は長岩屋山という山号のとおり、非常に横に長い岩屋群の中にいくつもの堂や龕を見る事ができる寺院です。特に修正鬼会の舞台にもなる講堂は、長岩屋最大の岩屋の中に作られています。また、龍門岩屋は中世においては、独立した六郷山寺院として安貞目録に見えるものですが、中世後期〜江戸時代にかけて天念寺と統合しています。

天念寺は中近世の段階で十二の坊を持っていたと言われており、最近の発掘調査によって、重蓮坊・円重坊といった坊の遺物や石造物群が発見され、その内容から一部の坊の成立が中世に遡ることが分かりました。多くの土器・瓦器に混ざって中国から輸入したと思われる陶器などが発見されたのです。円重坊跡には七十基を超える石塔が並んでおり、種字を大きく刻む五輪塔は南北朝前期にも遡り、国東塔も室町時代の様式を残しています。西ノ坊があったとされる境内から五〇メートル川下には板碑群があり、「永禄五年」「天正八年」の銘や、天念寺大般若経奥書にも見える人物銘があります。

長岩屋川には豊後高田市のシンボルの一つとなっている川中不動があります。伝仁聞作とされますが、実際には室町時代くらいのものであると言われてます。かつては暴れ川であった長岩屋川を鎮める意味があったとも言われています。

身濯神社の正面の橋を渡った先にある文殊種字自然石碑は、非常に大きな自然石で作られた石碑で市指定文化財です。多くの銘が施されており、「金剛仏子阿闍梨順賢」の逆修祈願の為に作られたことが分かります。

○松行地区

①金宗院跡

金宗院はかつては吉弘氏の菩提寺であり、江戸時代までは栄えてきましたが、戦後に無住になり今では本堂の礎石と墓が残るのみです。本堂の裏手には、室町時代から戦国時代のものでされる宝塔群が存在します。その中に吉弘鎮信の国東塔（相輪がなく、空輪・風輪を代置しています）や、現在では盗難に遭い復元されたものではありますが、吉弘統幸を供養する宝篋印塔もここに存在しています。

○築地地区

①寺ノ上板碑群

寺ノ上板碑は県指定文化財で十二基の板碑が密集する場所です。寺ノ上という名前の通り、

妙覚寺の上の小高い丘の上に並んでいます。戦国時代の銘や墨書が多く見え、「天文」「於肥州合志表討死」などの銘が見えます。妙覚寺は都甲氏の菩提寺とされ、寺ノ上板碑は別名「殿墓」と呼ばれていることから都甲氏一族の墓地であるとも考えられています。

○大力地区

①持地庵

持地庵は吉弘氏の家臣であった大力氏の菩提寺とされています。庵の中には「大力兵部」と呼ばれる人物の位牌が残されており、持地庵裏の墓地にも大力氏のものともみられる板碑があります。その板碑には「天正六年十一月十二日」の銘があり、幅・厚さが群を抜いています。以上の事から耳川の戦いに従軍した武将の板碑であったと推測できるのです。



持地庵板碑

また、持地庵の墓地の裏の茂みの中に角柱塔婆と呼ばれる独特の石造物があります。四面に額を持ち、種字などを刻む珍しい形状で、「応永」の年記が入っていることなどから墓碑としての役割を持っていた可能性があると言指されています。

○ 払田地区

① 旧妙覚寺跡

払田地区は条里制水田跡の所在地であり、荘園の経営面では最も重要な地点であったことは紹介しましたが、その払田の丘陵地に、貴船神社の東隣には旧妙覚寺があったと言われています。足を踏み入れると直線的な区画が見え、旧妙覚寺の面影は残していますが、実際には何も残っていません。発掘調査では弥勒寺僧が住む屋敷などの遺構が発見されたので、石造物の作成が盛んになる鎌倉時代末までには旧妙覚寺や都甲氏は払田を離れていた可能性が高いことを示唆しています。

西側の道沿いには寺ノ上板碑に移る前の都甲家墓地と伝えられる場所があります。近世墓が大半を占める中、一際大きな戦国時代の五輪塔や国東塔が混在しており、宝塔には「天正六年」の銘があり、耳川の戦いと関わる可能性があります。

中世の都甲地域に関わる年表

| | | |
|--------|----------------|-----------------------------|
| 奈良時代 | 8世紀 | 荒尾弘田地域に条里制に基づく水田ができる |
| 平安時代 | 11世紀頃 | 都甲荘が成立する |
| | 1113 | 六郷山寺院が天台宗化する |
| | 1120 | 六郷山寺院が延暦寺に寄進される |
| | 1130 | 長安寺太郎天像が作られる |
| 鎌倉時代 | 1183 | 緒方惟栄が長安寺を焼討にする |
| | 1196 | 大友能直が豊後国下向 |
| | 1228 | 安貞目録に長安寺が惣山と記される |
| | 1244 | 院主応仁の打札が掲げられる |
| | 1262 | 都甲惟親が京都大番役として院御所を警護 |
| | 1264 | 九州中の牛の怪死し六郷山が大般若経を転読 |
| | 1274 | 都甲惟親が元寇、鳥飼潟の戦いで活躍 |
| | | 六郷山寺院が異国降伏の祈禱を行う |
| | 1281 | 都甲惟親、惟遠が元寇、鷹島の戦いで活躍 |
| | 鎌倉時代末 | 夷山所領注文に鬼会の文字が見える |
| | 1333 | 鎌倉幕府が滅びる |
| 室町時代 | 南北朝内乱 | 南北朝内乱の各所で都甲氏が活躍する |
| | 1392 | 南北朝の統一 |
| | 1418 | 大内氏の宇佐神宮・弥勒寺再興が始まる |
| | 1435 | 姫嶽の戦いで持直方についた都甲氏の領土が一部没収される |
| | 1437 | 吉弘綱重安堵状などが出される |
| 戦国時代 | | 長岩屋伴僧の置文に吉弘綱重が追認する |
| | 16世紀初め | 吉弘氏が本拠を都甲地域に移す |
| | 1534 | 勢場ヶ原の戦いで吉弘氏直が討死 |
| | 永禄年間 | 吉弘鑑理が大友氏重臣としての活躍を見せ始める |
| | 1561 | 門司城の戦いなどで吉弘鑑理が活躍 |
| | 1568 | 立花鑑載・高橋鑑種の反乱で立花・高橋両家が滅亡 |
| | その後 | 戸次道雪が立花家を、吉弘鎮理（紹運）が高橋家を継ぐ |
| 安土桃山時代 | 1571 | 吉弘鑑理が病死 |
| | 1578 | 耳川の合戦で吉弘鎮信らが討死 |
| | 1579 | 吉弘統幸による屋山城の大改修 |
| | 1580 | 田原親貫の乱で吉弘統幸が活躍 |
| | 1581 | 立花宗茂が立花家に婿入りする |
| | 1582 | 吉弘統幸が下毛郡（現中津市付近）の悪党を撃退する |
| | 1586 | 岩屋城の戦いで高橋紹運が討死 |
| | 1587 | 吉弘統幸が伊勢参りをする |
| | 1593 | 吉弘統幸が文禄の役に参加 |
| | | 大友義統改易に伴い吉弘統幸が三池へ移住 |
| | 1599 | 大友義統が解放される |
| 1600 | 石垣原の戦いで吉弘統幸が討死 | |
| | 立花宗茂が改易 | |
| 江戸時代 | 1620 | 立花宗茂が柳川藩主に返り咲く |

人物索引

| | 別名 | 概要 | 章 |
|-------|----------|--|--------|
| あ | | | |
| 大友宗麟 | 三非齋、圓齋など | 大友氏の最盛期を築きあげる。 | 7 |
| 大友義統 | 中庵など | 文禄の役での敵前逃亡の為に改易されるが、大友氏の再興の為に統幸らを集めて挙兵する。 | 7・8・9 |
| 緒方惟栄 | | 源平合戦の頃に長安寺・宇佐神宮を焼討ちにする。 | 4 |
| 応仁 | | 鎌倉時代の六郷山の開発を行った僧。 | 3 |
| か | | | |
| 黒田官兵衛 | 如水等 | 秀吉の軍師。大友義統の挙兵を治めるべく中津から別府に兵を進める。 | 9 |
| 豪意 | | 江戸時代の初め六郷山年代記を記す六郷山僧。 | 3 |
| 豪経 | 豪慶 | 吉弘綱重の弟で六郷山執行を勤めていた。 | 6 |
| 豪仁 | | 吉弘氏によって常泉坊を安堵される。 | 6 |
| た | | | |
| 高橋鑑種 | | 立花鑑載に呼応して反乱を起こし、吉弘鑑理らに攻められ討死する。 | 7 |
| 高橋紹運 | 吉弘鎮理 | 鑑理の子。滅亡した高橋氏の跡を継ぐ。岩屋城の戦いで玉砕する。 | 7 |
| 立花道雪 | 戸次鑑連 | 大友氏の重臣を長く務めた。男児がなく、立花宗茂を養子にする。 | 7 |
| 立花宗茂 | 高橋統虎など | 高橋紹運の子。立花氏を継ぎ、秀吉の子飼衆として広く活躍した。柳川藩初代藩主。 | 7 |
| 都甲惟家 | 西迎 | 鎌倉時代の都甲氏の当主で複雑な相続を行う。 | 4 |
| 都甲惟親 | 寂妙 | 惟家の子。二度の元寇で活躍した足跡が残る。 | 4・5 |
| 都甲惟遠 | 寂仏 | 惟親の子。弘安の役で惟親と共に戦う。 | 5 |
| 都甲鎮仁 | 宗甫 | 耳川の戦いで戦死する都甲氏の当主。 | 7 |
| ま | | | |
| 源経俊 | | 平安時代に都甲荘を開発した人物。 | 2 |
| や | | | |
| 吉弘正堅 | 正賢 | 吉弘氏最初の当主。武蔵町吉広に本拠地を持つ。 | 6 |
| 吉弘綱重 | | 都甲地域に足跡を残す最初の吉弘氏当主。 | 6 |
| 吉弘氏直 | | 都甲地域に本拠を移したとされるが勢場ヶ原の戦いで戦死する。 | 6・7 |
| 吉弘鑑理 | | 豊州三老の一人。大友氏の重臣として北部九州を転戦する。 | 7 |
| 吉弘鎮信 | 宗鳳、宗仍 | 鑑理の子。北豊後の武士を取りまとめ、六郷山別当まで登り詰めたが耳川の戦いで討死する。 | 7 |
| 吉弘統幸 | 統運 | 鎮信の子。屋山城を改修。大友家再興の為に挙兵した義統に協力して石垣原の戦いに臨む。 | 8・9・10 |

都甲地域の文化財（六郷満山・吉弘氏関係）

| 番号 | 寺院・物件 | 文化財 | 概要 | 関係 | 地域 |
|----|----------|----------|--------------------------------|--------------|----------|
| 1 | 長安寺 | 長安寺伽藍 | 安貞目録で惣山とされた中世六郷山の中核寺院 | 六郷満山 | 加礼川 |
| 2 | | 長安寺坊跡群 | 本堂下の直線的な石段の左右に広がっていた | 六郷満山 | |
| 3 | | 太郎天像・童子 | 大治五年の墨書がある六郷山独特の仏像 | 六郷満山 | |
| 4 | | 銅板法華経 | 平安時代に作られた銅製の法華経 19枚が残る | 六郷満山 | |
| 5 | | 鬼会面 | 長安寺で修正鬼会が勤仕されていた時の面 | 六郷満山 | |
| 6 | | 国東塔 | 鎌倉時代に造られた市内最大級の国東塔 | 六郷満山 | |
| 7 | | 長安寺文書 | 六郷山全体に関わるような文書が多く残されている | 六郷満山 ・吉弘氏 | |
| 8 | | 宝篋印塔 | 天正十二年十一月十二日の吉弘鎮信七回忌に造立 | 吉弘氏 | |
| 9 | | 屋山城 | 長安寺の上に造られた吉弘氏の山城 | 吉弘氏 | |
| 10 | 天念寺 | 天念寺伽藍 | 中世には長岩屋と呼ばれた長岩屋地区の信仰の中心 | 六郷満山 | 長岩屋 |
| 11 | | 天念寺坊跡群 | 天念寺付近に点在する中世の坊跡で石造物が多い | 六郷満山 | |
| 12 | | 天念寺講堂 | 修正鬼会の舞台として知られる | 六郷満山 | |
| 13 | | 修正鬼会 | 市内では唯一となった旧正月七日の仏事 | 六郷満山 | |
| 14 | | 仏像群 | 国重文の阿弥陀如来立像など | 六郷満山 | |
| 15 | | 大般若経附奥書 | 中世から書写され続けた大般若経とまつわる記録 | 六郷満山 ・吉弘氏 | |
| 16 | 梅遊寺 | 板碑 | 建武三年、応永廿一年の銘が見える | 六郷満山 | 一畑 |
| 17 | | 位牌 | 吉弘鑑理・鎮信・耳川合戦戦死者の位牌 | 吉弘氏 | |
| 18 | 三島神社 | 虚空蔵菩薩像 | 中世虚空蔵岩屋と呼ばれた三島社の室町時代の仏像 | 六郷満山 | 加礼川 |
| 19 | 持地庵 | 板碑 | 天正六年、耳川合戦戦死者関係の板碑 | 吉弘氏 | 大力 |
| 20 | | 角柱塔婆 | 応永の銘から墓碑の役割りを持つことが分かる珍しい石造物 | 吉弘氏 | |
| 21 | 金宗院跡 | 金宗院跡 | 吉弘氏の菩提寺と言われる | 吉弘氏 | 松行 |
| 22 | | 宝篋印塔(再建) | 吉弘統幸の供養塔を昭和に再建している | 吉弘氏 | |
| 23 | 都甲家墓地 | 宝塔 | 天正六年、耳川合戦戦死者関係の宝塔 | 吉弘氏 | 払田 |
| 24 | 荒尾払田条里遺跡 | 条里水田遺構 | 都甲荘開発以前の条里水田の遺構が一部残る | 都甲荘 | 荒尾 払田 |
| 25 | | 堰 | 一部中世に遡ると見られる都甲荘でも重要な水田遺跡 | 都甲荘 | |
| 26 | 旧妙覚寺 | 国東塔 | 都甲荘の中心払田の丘陵部旧妙覚寺があり、都甲氏の墓地がある。 | 都甲荘 | 払田 |
| 27 | 妙覚寺 | 位牌 | 天正六年、耳川合戦戦死者の位牌 元々は金宗院にあった | 吉弘氏 | 築地 |
| 28 | 智恩寺 | 国東塔 | 講堂前にある南北朝期の大型国東塔 | 都甲荘 | 払田 |
| 29 | 弥勒院跡 | 弥勒院跡 | 都甲荘荘官の弥勒寺僧などが暮らしていたとされる | 都甲荘 | 払田 |
| 30 | 道脇寺 | 道脇寺文書 | 室町時代初期の吉弘氏の活動を確認できる貴重な史料 | 六郷満山 ・吉弘氏 | 加礼川 |

参考文献一覧

- ・飯沼賢司「中・近世の六郷山寺院と峯入り」(『別府大学アジア歴史文化研究所報』(一八)、二〇〇〇年)
- ・大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国都甲荘の調査』(一九九三年)
- ・櫻井成昭「六郷山研究の成果と課題」(『大分縣地方史』(二〇四)、二〇〇〇年)
- ・段上達雄「中世六郷山寺院の法会一」(『別府大学大学院紀要』(一〇)、二〇〇八年)
- ・段上達雄「中世六郷山寺院の法会二」(『別府大学大学院紀要』(一一)、二〇〇九年)
- ・橋本操六「大友家臣の氏姓門閥・国衆の解釈」(『大分縣地方史』(一二三)、一九八六年)
- ・豊後高田市『くにさきの世界 くらしと祈りの原風景』(一九九六年)
- ・豊後高田市『豊後高田市史』(一九九八年)

参考史料集

- ・大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国都甲荘の調査 資料編』(一九九二年)
- ・田北学編『増補訂正編年大友史料』(全三十三巻、一九六三年～一九七一年)
- ・渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成二 豊後国来縄郷・小野荘・草地荘・都甲荘・真玉荘・白野荘・香々地荘史料』(別府大学附属図書館、一九八五年)

都甲谷の歴史 —六郷満山と吉弘氏—

平成 26 年 11 月

編集：豊後高田市教育委員会

〒872-1101

大分県豊後高田市中真玉 2144-12

TEL0978-53-5112

印刷：有限会社 宗印刷所

表紙のイラスト／松本 奈央美

